

Close Up

クローズアップ 交通教育センター②

「人・企業・信頼」をテーマに開催

～2019 トラフィック セーフティ・フォーラム in 埼玉～

昨年11月27日、埼玉会館（埼玉県さいたま市）で「2019 トラフィック セーフティ・フォーラム in 埼玉」が開催された（主催：交通教育センターレインボー埼玉・和光）。このフォーラムは、交通安全活動に取り組む企業や団体を対象に事故防止の施策などの情報交換を目的に行われており、この日は企業・団体から約300名が参加。開会にあたり、主催者を代表して佐竹正規（株）レインボータースクール代表取締役社長、来賓を代表して古賀康弘 埼玉県警察本部交通部長が挨拶を行った。

まず、交通事故防止活動の事例発表として、首都高パトロール（株）業務部管理役 大竹敏志さんが、首都高速道路での業務における安全対策を紹介。同社は全線約320km、1日に約100万台の車両が通行する首都高速道路の安全確保を担っている。事故・故障車・落下物といった交通障害が年間約4万8000件（2018年度）も発生。事故は減少しているものの、落下物については増加傾向だという。

同社はパトロールカーで定期的に首都高速道路全線を巡回監視している。そして、事故・故障車・落下物等の異常事態が発生した場合は、交通管制室と連携して二次事故を防止するため、速やかに交通規制を実施するなど必要な措置を講じるのだ。1日の

パトロール回数は141回で、走行距離の合計は約1万3000kmになる。

こうしたパトロールカーやバイク隊（下記参照）の事故を防止するため、同社では様々な対策を実施。安全運転中央研修所や警視庁交通安全教育センター、Hondaの交通教育センターでの実技研修を利用するなど、社員が安全運転技術の向上に努めている。また、動画KYT※（危険予測トレーニング）を活用し、交通状況の変化に潜む危険に意識を向けることを指導したり、現場でのヒヤリハット事例についてドライブレコーダーの記録映像を全社員で共有し、事故防止に役立てている。このほかにも、「クルマに背を向けない」「相手の安全に気を配る」「自分の身は自分で守る」という安全の三原則を朝・夕礼で唱和し、安全への意識づけを図っているという。「このような取り組みを推進した結果、パトロールカーによる事故件数は減少しています」と大竹さんは話す。

この後は、SOMPO リスクマネジメント（株）モビリティコンサルティング部自動車グループ主席コンサルタント 落合律さんが「事例から読み解く効果的『自動車事故防止』活動のポイント」というテーマで講演。「事故を予防し、削減するには現場管理者の役割が重要です。管理者は『なぜ



会場には企業・団体の安全運転を推進する担当者を中心に約300名が集まった



首都高パトロール（株）業務部管理役 大竹敏志さん

事故が減らない？」と考えるのではなく、『事故を減らすために自分ができることは何か？』を考えてほしいと思います。ドライバーに交通安全を押し付けるのではなく、興味を持って取り組める環境を整備してください」と述べ、実車訓練やドライブレコーダーを有効活用した事例などを紹介した。「対策を実施したら、必ずその効果



SOMPO リスクマネジメント（株）モビリティコンサルティング部自動車グループ主席コンサルタント 落合律さん

を検証してください。定期的に検証を行うことで、さらなる問題点を見つけることができ、成果を出すことにつながります」と落合さんは締めくくった。

※ Hondaが開発した教育機器。実際の交通状況を再現したCG動画を見ながら危険を予測し、その過程を受講者同士が振り返りながら話し合うことで危険感受性を高められるようになっている。

トンネル内での火災発生時、現場で初期対応にあたる首都高パトロールバイク隊

首都高パトロール（株）にはパトロールカーのほかにバイク隊も存在する。これは民間企業として日本で初めて緊急指定を受けた二輪車で、その車体の色から「黄バイ」と呼ばれている。

首都高速道路の中央環状線・山手トンネルは全長18.2kmに及び日本で最も長い道路トンネルだ。この区間で火災が発生した場合は、迅速にトンネル内を通行する車両の安全を確保しなければならない。そのため、渋滞の中でも、いち早く現場に到着できるようにバイク（400cc）を導入したのである。2007年12月、山手トンネル（当時は6.7km）の開通に合わせ、バイク隊を創設。28名でスタートした隊員数は現在



では53名となっている。

バイク隊は5交代勤務のため5班に分かれている。1班は10名で、2名1組となり3組がバイク、2組がパトロールカーを担当。バイクの3組は山手トンネルの入り口にある志村基地（北側）と大井基地（南側）、中間点である大橋ジャンクションの3カ所で待機している。副隊長を務める仲昌利さんは「バイク隊は、トンネル内で何か事象が発生した時のみ出動することになっています。どこでどのような事象が発生するか、様々なパターンをシミュレーションしているので、その想定を踏まえ最適な場所に待機している隊員が現場に急行します」と説明する。

バイク隊の主な役割は「トンネル内への車両の進入を防ぐため、坑口（トンネルの入り口）での車両停止制御を行う」「火災現場に接近する車両を防ぐため、上流の出口で排出誘導を行う」「火災現場に到着し、現場の状況の把握および車外避難誘導を行う（状況によっては消火も行う）」という初期対応である。また、事故や故障車などトンネル内で交通障害が発生した際も出動し、二次事故を防止するために通行車両を誘導したり、現場の状況を交通管制室へ報告するといった活動をしている。隊員の荒巻翔遥さんは「最初に到着するのは常に私たちです。現場の状況を確認して報告するだけでなく、時には自分一人での後の対



Honda CB400SBがベースとなっているバイク隊の車両。隊員は万が一に備え、エアバッグとボディプロテクターを内蔵したベストを着用している



2名1組で現場に急行し、初期対応にあたる



首都高パトロール（株）バイク隊副隊長 仲昌利さん（左）、同隊員 荒巻翔遥さん（右）

応を瞬時に判断しなければいけない場合もあり、たいへん重要な役割を担っていると感じています」という。

バイク隊は迅速かつ確実に現場に到着することが求められるため、安全運転技術の向上にも力を入れている。1ヵ月に1回は班ごとに自主訓練を行っているほか、1年に1～2回、交通教育センターレインボー埼玉での安全運転研修にも参加している。

近年、首都高速道路では車両火災が多発している。その多くはエンジン部もしくは車両下部から出火するケースだという。車両故障に起因する火災は日常的な点検・整備によって防ぐことができると考えられる。オイルと冷却水の点検・補充、タイヤの摩耗や空気圧の点検を忘れないようにしてほしいと、同社はドライバー・ライダーに呼びかけている。